

## ムツラーの訴え

予定どおり、葬儀は翌朝とりおこなわれた。茶褐色の荒涼たる山々を背景に、まるで埃っぽい土中から湧き出したような荒れ果てた村落の残骸の中で、ささやかな戦場の弔いであった。

遺体は手作りの柩に納められ、別れを惜しんだ後、ふたは無造作に釘で打ちつけられた。深さ約一メートルほどの長方形の穴を二段に掘り、平たい石で柩の安置された下段の縦穴を覆って、さらに泥で密閉する。その上に土盛りし、自然の板石をメッカに向けて突きさし、これを墓標とする。「土に帰る」というが、まさにその通りであった。

質素な葬式にはカラシニコフ銃で武装した数百名の住民が参列し、慣習に則ってムツラー（イスラム僧）がコーランの句を唱えて祈りを捧げた。そう遠くない所で時折砲声のこだまする中、やつれた面持ちのムツラーは、列席の住民たちに訴えた。

「彼は今神の御元に帰る。この十数年、彼は難民として幸せではなかっただろう。彼は死んで初めて永遠の平和を得た。我々もそうである。我々はジハード（聖戦）を継続するだろう。かつてアンダレーズ（英国）に対して歴史的闘争を行ったように、我々は全ゆる侵略者と戦うだろう。イスラムを守り抜け。だが、注意せよ。イスラムの同胞をイスラムの名で圧迫するのはイスラム教徒ではない。我々の厄災はいつまで続くのか。かつての平和な田園の暮らしはいつ戻るのか。」

列席した住民たちの間に深いうなずきと、どよめき起きた。



ペシャワールから険路を十二時間もかけて遺体と親族をJAMSが輸送し、故人の故郷でわざわざ葬儀が行われたのはもう一つの訳がある。住民不在のまま進む「新秩序」と援助による感傷を、地元民の健在を誇示することによって、牽制する必要があった。住民の断固たる意思を示すデモンストレーションである。同時に、先祖伝来営々と営まれてきた田園の生活は、戦いで追われて難民となった住民たちの心深く、望郷の念をかき立てていたからである。あまりに多い犠牲にもかかわらず、ここでは人の死の意味が人々に重くかみしめられていた。

十年ぶりの荒れたわが家を前に、呆然と立ちすくむ者のあった。葬儀の行われた家の井戸の中には、白骨化したソ連兵の死体が放置されていた。深さ五メートル程の井戸の底を覗くと、白骨死体と対照に、地下水の清澄な青さが不気味なほど美しかった。人々は無感動にそれを眺め、生まれ育った村の懐かしい木々、小川の流れ、モスク、井戸、駆け登った人々の一つ一つを、少年時代の思い出と共に、とりとめもなく語った。しかし、たとえそれが如何に心地よい感傷を呼び起しても、砲声がすぐに彼らを現実を引き戻すのであった。

